

注意

- ▲ アルミホイールとスチールホイールではボルトナットが異なる場合があります。装着される車両に合ったアルミホイール用のものをご使用ください。
- ▲ 車種によっては、アルミホイールの装着ができない場合があります。適合車種に関しては事前に販売店様にご確認ください。
- ▲ ホイールを装着する際、ボルトとナットのネジ部、座面及びホイール座面を点検し錆やゴミ、汚れを取り除いてください。
- ▲ ホイールナットの締め付けトルクは車両メーカー指定の規定トルクで締付けてください。ホイール装着後は50～100Km走行を目安に規定トルクで増し締めを行ってください。
- ▲ 必ず乾燥エアを充填してください。また、タイヤ交換時などはタイヤ内に水分が入らないよう注意してください。水分により錆や腐食が発生することで、ホイール不具合を引き起こすことがあります。
- ▲ 海辺や雪路、悪路などを走行した後は手作業でよく水洗いをしてください(融雪剤、凍結防止剤、塩分、土などの付着により早期腐食を招きます)。
- ▲ 粗い磨き粉や強酸/強アルカリ系の洗剤、金タワシや不織布、硬いブラシなどは使用せず洗浄してください。また、洗剤使用後は十分に水洗いし水分を拭き取るようにしてください。
- ▲ 走行中に異常な振動や異音などが発生した場合は、すぐに安全な場所に停車してください。ホイールナットの緩みや空気圧異常での走行は、ホイール破損やナット脱落、ボルト破損などを生じさせるため大変危険です。
- ▲ ホイールのナット取付け面やハブ取付け面に過度な摩耗・錆汁の流出が確認された場合、締結不具合が生じています。この状態での走行はホイールへの負荷が過度に増大するため、耐久性が極端に低下してホイール損傷や脱輪の原因となります。ハブ取付け面の摩耗量が0.3mm以上ある場合は使用を中止し、車両点検(車両ハブ・ホイールボルト・ホイールナットなど)を行い、新しいホイールに交換してください。
- ※ 摩耗が進んでいるハブに新しいホイールを装着した場合は、ハブ取付け面の摩耗量に関わらず密着性が極端に低下するため、異常負荷がホイールに対し加わりますので、ホイールが早期に損傷をうけます。
- ▲ エアバルブは1年を目安に新品にお取替えください(エアバルブのシーリング材はゴム製のため使用により劣化します)。
- ▲ バルブ交換の手順は以下の通りです。
- ▲ ① バルブ取外し後、バルブ穴円筒内やバルブ座面の異物や汚れを確実に除去してください。
- ▲ ② 新品バルブのシーリング材およびネジ部に非水溶性の潤滑剤を十分に塗布してください。
- ▲ ③ 適正トルク(15N・m)で締付けてください。
- ▲ リムフランジ部はタイヤからの反復荷重により摩耗することで凹みます。軽度の凹みはホイールの機能に影響はありませんが、シャープエッジの凹みはタイヤ脱着時にタイヤビード部を損傷する可能性がありますので、鋭利な部分のみヤスリ等で滑らかにしてください。エッジを変形しないよう必ずご注意ください。
- ▲ 排気ガス処理システムで尿素SCRシステムを搭載している車両では、排気管後方のアルミホイールが黄色く変色する場合がありますが、ホイールの耐久性には影響ありません。この変色はアルコアのスーパー・シャイン・アルミナム・ポリッシュなど研磨剤で落とすことが可能です。
- ▲ タイヤ組付け時は非水溶性の潤滑剤をタイヤビード部、リムフランジ部に塗布してすべりを良くしてください。水溶性の潤滑剤はホイールの錆や腐食が促進されます。また、タイヤビード部周辺のキズなどで空気漏れを起こすことがあります。タイヤレバーなどで傷つけないようにご注意ください。

警告

- ▲ 日常点検、定期点検は必ず行い、ホイールに亀裂、損傷、変形、著しい腐食が無いことを確認してください。異常が生じたホイールの使用は危険です。すぐで新しいホイールに交換してください。
- ▲ 過積載は絶対に行わないでください。最大積載量未満でも、片荷など偏った積載も行わないでください。
- ▲ 走行中に異常な振動や異音が発生した場合は、すぐに安全な場所に停車してください。ホイールナットの緩みや空気圧異常での走行は、ホイール破損やナット脱落、ボルト破損により車輪脱落事故の原因となります。
- ▲ 道路の縁石等への乗り上げや脱輪、ホイール側面接触は避けてください。
- ▲ 車両火災などでホイールが高温にさらされた場合は、すぐに使用を中止してください。
- ▲ 法定速度を順守し、急発進、急加速、急旋回及び急制動は避けてください。
- ▲ 溶接や切削、刻印加工など、ホイールの修理および加工、改造などは絶対に行わないでください。
- ▲ アルミホイールとスチールホイールの混用は絶対にしないでください。
- ▲ ※ 混用した場合、ホイールに大きな負荷がかかります。その結果、目視できないひずみや、強度低下による変形や亀裂などを生じさせます。これらは重大事故を起こしたり比較的短期間でホイールを損傷させた利する原因になる可能性があるため、このような使い方はしないでください。
- ▲ 空気充填の際はタイヤを安全囲いの中に入れるなどの安全措置を講じた上で空気を充填してください。ビードシーティング圧300kPa(3.0kgf/cm²)以下の空気を充填後、タイヤの両側のビード部がリムのビードシート部に周上均等にのっている事を確認した後、タイヤの使用空気圧まで空気を充填してください。
- ▲ タイヤビード部がホイールのビードシート部に正常にのっていない場合は一旦空気を抜き、タイヤとホイールに異常が無いことを確認の上、タイヤのビード部およびホイールのリム部に再度潤滑剤を塗布してから空気を充填してください。
- ▲ バルブコアを付けない状態での空気充填は絶対にしないでください。(急激な圧力上昇となりタイヤ破裂の危険性があります。)
- ▲ エアコンプレッサーの調整弁は、タイヤ破裂の危険があるためタイヤの使用空気圧に応じて下表に従い調整してください。

タイヤの使用空気圧区分	調整弁の最高調整空気圧
400kPa (4.0kgf/cm ²)まで	500kPa (5.0kgf/cm ²)
400kPa (4.0kgf/cm ²)超 ～ 600kPa (6.0kgf/cm ²)まで	700kPa (7.0kgf/cm ²)
600kPa (6.0kgf/cm ²)超 ～ 900kPa (9.0kgf/cm ²)まで	1,000kPa (10.0kgf/cm ²)
900kPa (9.0kgf/cm ²)超 ～ 1,200kPa (12.0kgf/cm ²)未満	1,300kPa (13.0kgf/cm ²)

※製品箱内に取扱い説明書が同梱されています。そちらも必ずご確認ください。